

道路維持管理 大切さ知って

福島で写真展

建設作業員が道路の修繕や除草などに汗を流す姿を写した「インフラメンテナンス写真展」が、福島市のふくしんギャラリーで開かれている。市内の寿建設が維持管理の現場を知っても



写真を眺める山崎さん(右)と森崎社長

らうために企画した。31日まで。

写真は計33点。国内外で活躍する写真家山崎エリナさんが昨年9月ごろから、同社の依頼を受けて撮影した。傷んだ道路を特殊な器具で補修する様子や、降り積もった雪を取り除く場面など、生き生きとメンテナンスに打ち込む作業員の姿を切り取っている。

寿建設の森崎英五朗社長は「インフラのメンテナンスは新築工事に比べて光が当たらず、渋滞を引き起こす厄介者扱いを受けることさえあるが、安全を支える大切な仕事であることを多くの人に知ってほしい」と話す。

午前9時～午後5時。28日は山崎さんらのトークショーがある。

7月28日 河北新報

建設業の魅力発信へ
和合さんらがトーク

福島市のふくしんギャラリーで開催中の「インフラメンテナンス写真展」に合わせ、同会場で28日、ト



建設業の伝え方について
語ったトークショー

ークショーが開かれ、写真家の山崎エリナさんが工事現場の写真を撮影する狙いなどを話した。

午前と午後で約100人が来場。「表現者たちと語

る、建設業の伝え方」がテーマ。午前は詩人和合亮一さん、午後は福島ガイナックスの浅尾芳宣社長が登壇し、建設業の魅力発信などについて語った。

同写真展は寿建設(森崎英五朗社長)の主催。会場には山崎さんが撮影した、同社が請け負っている工事現場の写真約30点が並んでいる。入場無料。時間は午前9時～午後5時。31日まで。

7月30日 福島民友

対談する山崎さん（左）と和合さん。右は司会の森崎社長



建設現場写真で対談

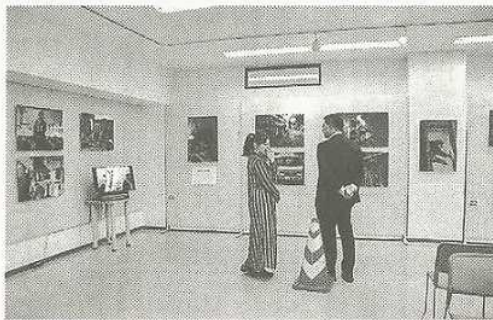
福島 撮影の裏側など紹介

二十六日に福島市のふくしんギャラリーで始まった道路や橋などインフラを維持管理している現場に光を当てた写真展のトークショーが二十八日、同所で開かれた。撮影した写真家山崎エリナさん（神戸市出身）と福島市の詩人和合亮一さんが「表現者たちと語る、建設業の伝え

方」をテーマに対談した。市民ら約四十人が参加。主催した市内の寿建設の森崎英五朗社長が司会を務め、撮影の裏側や表現方法、建設業界の現状を語り合った。

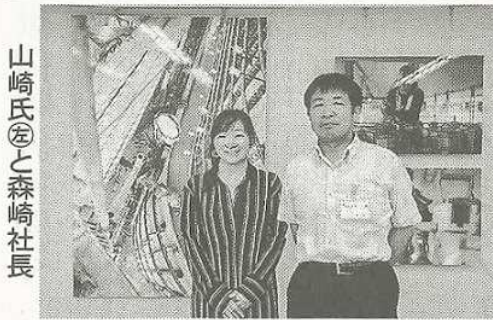
山崎さんは対談の中で「道路や橋などは通れることが当たり前だと思いがち。実際の現場では汗水流して仕事に向き合っている方々がいて、感動しながらシャッターを切った」と振り返った。和合さんは「働く人の空気感が生き生きと切り取られていてすばらしい」と語った。

引き続き山崎さんと福島ガイナックスの浅尾芳宣社長の対談も行った。



**工事携わる人の魅力を
寿建設、インフラ
メンテ写真展**

寿建設（福島市、森崎英五朗社長）は26～31日、福島市の福島信用金庫ふくしんギャラリーで「インフラメンテナンス写真展」を開催している。写真展は、同社が手掛けるインフラメンテナンス管理の工事現場を、写真家の山崎エリナ氏が撮影した。山崎氏は開催に当たり、「私たちが安心して暮らせ



山崎氏と森崎社長

る背景に、多くの人たちが携わっていることを知った」と振り返った。

昨春秋ごろから月1回のペースで現場を訪れ、撮影した2～3000枚の中から展示作品を選んだ。初めて建設工事現場や働く人の様子に焦点を当てて撮影する中で「最初は工事のスケールに驚くばかりだったが、現場の皆さんが鮮やかな連携プレーで作業を進める姿に感動した。ひたむきに施工に取り組む背中に魅

力を感じ、気がいたら人物を中心に撮影していた」とエピソードを語った。阪神淡路大震災を経験していることにも触れ「当時、復旧作業に当たった方々のことを思い浮かべながら、工事完成までのプロセスを勉強させてもらった。作品を通して、一般の人や子どもたちに建設工事やインフラの更新・メンテナンスの大切さを伝えたい」と話した。

森崎社長は「建設工事は何事もなく進むのが当たり前で、普段はなかなか一般の人から注目されにくい」とした上で、「山崎さんが建設業のかっこいい部分と社員らの笑顔をたくさん撮ってくれて感謝している。自分の仕事を紹介しようと、家族を連れて来場する社員もいた」と話した。

作品は今後、東京や関西方面を巡回するほか、インフラメンテナンス国民会議などで展示する予定だ。

7月30日 日刊建設工業新聞

プロの写真で現場の魅力発信

建設産業アピールに新風 写真家・山崎エリナ氏が撮影

寿建設（福島市、森崎英五朗社長）が、7月26日から31日まで福島市内のふくしんギャラリーで行った「インフラメンテナンス写真展」は、写真家・山崎エリナ氏が撮影した現場写真が評判を呼び、連日、多くの関係者や市民らでにぎわった。一般社会への発信力不足が指摘される建設業界だが、アプローチによっては訴求力を発揮できることを裏付けた。

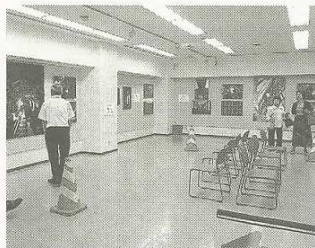
プロによる現場写真の撮影は、インフラメンテナンスの重要性を広く一般にアピールするとともに、今後の人材確保につなげようと、森崎社長が発案。昨年、知人に紹介されたのが、国内外の第一線で活躍している山崎氏だった。

山崎氏に工事現場の撮影経験はなかったが「知らない世界をのぞいてみたい」という好奇心もあり、依頼を受諾。最初に訪れた除草現場で、誇りを持って仕事に取り組

む技能者の姿や一体感のある連携作業に感銘を受け、自然と“人”に焦点を当てて撮影するようになっていった。

もともと「相当すごいカメラマン」だと認識していた森崎社長だったが、除草現場の写真を目の当たりにし「信念を持って働いている人間を表現してくれている。草刈り（という地味な現場）ですら非常に良かった」と、改めてその感性と技量の高さを実感。社員の評判もすこぶる良かったことから現場撮影を続けることにした。

その後、道路、水路トンネル、橋梁などの補修や除雪の現場などの現場を撮影し、撮りためた写真の枚数は既に2,000枚を超える。当初、維持・補修事業にうとかった山崎氏だが、撮影を重ねる中で「1つひとつ欠かせない仕事に、全員が怠ることなく向き合っている。体力・精神力、頭脳のすべて



パネルに見入る来場者



森崎社長（左）と山崎氏

が必要な仕事」と理解を深め、いまや「コミュニケーションを交わす瞬間に垣間見える笑顔、人と人の信頼関係とそこから生まれる作業の連携が素晴らしい」と「現場人」にほれ込んでいる。

こうした取り組みを紹介しようと森崎社長が作成した写真冊子は、配布早々に底を尽く人気ぶりで、山崎氏には冊子を見た建設業関係者から複数の撮影オファーが寄せられているという。

33点のパネルと、約100点の写真のスライド式に映し出すPCモニターが展示された今回の写真展でも、来場者からは「芸術だ」

「素晴らしい」など、展示作品を称賛する声が相次ぎ、中には感動のあまり涙を流す来場者も見受けられた。会期中の入場者は延べ約400人に及んだ。

発注者からも写真の使用要請が寄せられる中、森崎社長は「（撮りためた写真を）倉庫に眠らせておくのはもったいない。機会があれば活用したい」と今後の使い道に思案を巡らす。

見る者に感動を与えるプロの写真が、インフラメンテナンスのアピールに大きく寄与した今回のケースは、今後の情報発信のあり方の1つのヒントとなりそうだ。

8月6日 建設通信新聞

→WEB版 <https://www.kensetsunews.com/web-kan/223591>

フランス
メンテナ
イメン

写真展に350人來場

トーク
ショー
異分野のプロが助言

写真家の山崎エリナ氏
が維持管理・補修現場の
写真を撮影した作品を集



トークショーを行う(左
から)山崎氏、浅尾氏、
森崎社長

めたインフラメンテナ
ス写真展が26日から31日
まで、福島市のふくしん
ギャラリーで開かれ、6
日間で約350人が来場
した。28日には山崎氏と
詩人・和合亮一氏、映像
プロデューサー・浅尾芳
宣氏のトークショーが行
われ、異分野のプロがそ
れぞれの目線から建設業
の役割、情報発信のピン
トなど話した。

写真展はインフラメン
テナンスの重要性を一般
市民に周知、理解しても
らおうと、寿建設(森崎
英五朗代表取締役社長)
が企画した。インフラメ
ンテナンス国民会議など
の協力、東北地方整備局
福島河川国道事務所、県
福島市、県建設業協会、
福島建設工業新聞社の後
援。

真を撮っている。
写真展は、山崎氏が半
年間で撮影した約300
0枚の写真から33点をピ
ックアップ。①道路補修
②水路トンネル補修③道
路除草④橋梁補修⑤道路
トンネル補修⑥道路除雪
の6テーマに分けて現
場の様子や、真剣に働く
従業員らが時折見せる笑
顔を収めた作品等を展示
した。

「真を撮っている」と話し、「過酷な
現場で働く人がいて、安
全安心が実現することを
知ってほしい。建設業を
子どもたちの憧れの職業
にしたい」と会場に呼び
掛けた。

和合氏は、土木工事に
携わっていた祖父の影響
で建設業を身近に感じ、
幼少のころから設計図の
裏面をメモ用紙に使って
いた体験などを披露。「当
時から図面から何事も始
まると感じていた。震災
後の復興・再生へと向か
っていく姿は福島に住む
人の誇りを育んできた。
何かが壊れてまた建つと
いうことは、そこに住む
人間の心、誇りを立て直
すことに必ずなる」と建
設業が果たす役割の重要

性を表現した。
アニメーション制作会
社・福島ガイナックス社
長の浅尾氏は、建設業の
情報発信について、県産
農産物のPRアニメを手
掛けた経験から「安全
安心」を言葉で伝えて
も、理解はされるが響か

ない」と視点を改めてア
プローチすることを助
言。人に気付かれずメン
テナンスを行う建設業を
忍者に例えたり、自分な
りにアレンジしたヘルメ
ットなどを提案したりし
て遊び心を持つ大切さを
説いた。